# 監督生活38年
# 楕円球人生の終わりはまだ先

## 青森北高校ラグビー部監督
## 山崎久造

**戦いを終えて…**

20[illegible]全国大会の花園ラグビー場[illegible]ラグビー部を通算24年間[illegible]の姿があった。[illegible]レゼントしたい」と[illegible]佐賀工（佐賀）に[illegible]りの3回戦進出はならなかった。

大会を終えたばかりの1月下旬、同校に監督を訪ねた。熱戦の余韻がさめない山崎は「敗れはしたが、[illegible]よく頑張った。スクラムで[illegible]パワーで押すラグビーを貫いた」と[illegible]3月から始まる新人戦のことで頭がいっぱい。[illegible]い。教員生活もいつかは終わりが来る。[illegible]時が来ればおのずと身を引くだけ」と熱血監督の素顔はあくまでも自然体だ。

①数多くのトロフィーや賞状がラグビー部の軌跡を物語る
②廊下は冬の主な練習の場。山崎監督は見守るのみ
③トレーニング室でも「自分で考えて行うことが自分の身になる」とトレーニングメニューはない
④ラグビー部関係なく生徒の人生相談にのる山崎先生

### 監督生活38年

監督歴は前の三沢商業時代を含め38年に及ぶ。花園出場は三沢商時代に3回、青森北では実に11回を数え、県内きってのラグビー名門校へと育て上げた。花園大会では県勢初のベスト8にまで導いている。「花園出場は選手自身が努力で勝ち取ったもの。選手の成長を間近に見られるのは監督冥利に尽きる」名将は選手をたたえることも忘れない。

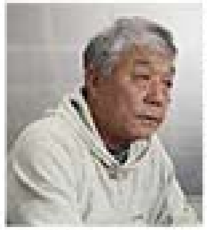
山崎自身は「花園」を経験していない。高校1年時から司令塔スタンドオフを務め県3連覇に貢献するが、黒沢尻工業の壁に阻まれた。進学した日体大でもなかなかレギュラーに定着せず、3年生でレギュラーの座をつかみかけたが、過労から体調不良となりシーズンを棒に振った。4年生でようやく白と青の段柄ジャージを手にしたが、脚光を浴びることは少なかった。指導者山崎の原点は順風満帆でなかった選手時代の経験にある。「高校、大学と苦しかった思い出ばかりがよぎる。それでも良き仲間がいたからラグビーを続けてこられた。挫折を味わい、悔しさを知っているからこそ全国で戦える集団を作りたかった」

山崎が目指したのは「考えるラグビー」。本県は中学校にラグビー部がないため、初心者の指導から始めなければならない。「どうやってラグビーの楽しさを教えるか。一日でも長くラグビーを続けるにはどうしたらいいのか。そのために、選手が自分の目標を自分で見つけることから始めた」。一人ひとりが手本となる選手を見つけ、その選手のプレーに到達、超えるように仕向けた。

「体づくり」でも体重の数値目標などを課すことはしなくなった。「走りこみや筋トレにしても、足りない部分を自ら自覚し補強するよう求めた」。どこまでも選手の自主性を重んじた。自身も人に言われてやるのは嫌いだった。「向上心を絶やさないチーム作り」はこうして醸成されていった。

選手に寄り添う「気配り」も山崎が貫いてきた姿勢だ。練習中は指示を出すことなく、選手の動きをじっと眺める。「そうすると、個々の選手の課題が見えてくる。乗り越えるべき壁を意識しアドバイスするようにしている」。監督の助言で選手の頭の中に試合を想定したイメージが植え付けられる。「試合でのいろんな状況に対応できる『引き出し』を増やしてあげるのが指導者の仕事」と言い切る。

理論に裏付けられた技術論より精神論により軸足を移した山崎の指導方法は、選手と二人三脚で歩んできた経験が礎となっている。「自分が若いころは結果が全てでやってきた。勝ちを重ねることにそうしたギラギラ感がなくなり、『攻めたい』『勝ちたい』『勝たせたい』の強い気持ちで臨んだ試合は、九分九厘勝てなかった。監督の思いが選手の動きを縛っていた。勝ち負けという結果からの重圧を取り除き、平常心で試合に臨んだとき、選手は実力以上の力を出す。そのことを選手から学んだ」。監督は選手を育てるが、監督も選手から育てられる。



山崎久造監督